

云ひながら大變の朝寝、急いで起きて床をたゞみ着物を着換へ、其邊をよく取り片付けなどして後、齒磨と手拭とをさげて裏へ出た。

井戸端で何かひろつて居た小雀が、妾の足音に驚いて五六羽バツと飛び去つた。其行方を見送るともなしに見送ると、六甲山の頂はまだ白う雪がつかもつて綿帽子をかぶつたやう。

手水を使つてから庭の方へ出て見ると、二三日前まで半開であつた梅もけさは大方咲いて、其下の瓢形の池に二三片花瓣が浮いてゐる。

朝の氣がひやゝかに胸にせまつてくる心地よさ、思はずも深呼吸を五六回行つて居ると、後の方で突然。

「姉ちゃん！お早う」小さい足音がしたのでより向いて見ると、お隣りの菊ちゃん可愛らしい人形を抱いて立つてゐる。妾も輕うお早うと會釋すると、

「姉ちゃん妾……あのお嫁に行くの」

「どこへ……」

「武雄ちゃんの家へ」——武雄は今年七つになつた妾の弟。

「どうして……それは何？」抱いてゐる人形を指さすと「これ……これはねあたいの赤様よ」

兄様はあかへりか知らと、のぞいて見たがまだあかへりにならない様子、紫メリンスの座蒲團が冷たさうに机の前に置いてある、こそつとはいつて見る。

まア此机の塵は……私がさして上げた水仙の花も大なしだわ。

机の上に積まれてゐるのが、銀鈴、文庫、寮歌集、アラ西洋獨り占ひなども……それから勢揃ひ、金色夜叉が前編と續々編、繪端書ブックが一通、帖。北海の荒武者と亂暴な字の手紙が一通、忘れな草の繪端書がこれは西都のせいらぎよりと。蒔繪の硯箱の上には紫インキが一壺、筆さしにはいづれも坊主になつた筆ばかり二三本。引出しを開けて見ると巻紙やらカートやらが、ゴチャ／＼と、何氣なしに片々のを開けて見るとピカリアアラツと驚いてよくよく見ると丸形の懐中鏡であつた。猶よく見るとマア櫛やらコスメチックやら……オホ、今度私をいぢめた時、みんな素ッば抜いてやるから、オヤ此指輪は私の指二本もは入りさうなこと！

本箱の上には緋ぢりのお蒲團に臥牛がゆつたりと。中は皆學校の教科書ばかり。正面には水車小屋の油繪が

「マアもう赤様があつて……」妾がびつくりしたやうな顔をして見せると、菊ちゃんは眞面目にうなづいて、

「姉ちゃんもお出よ……あたい所の小供にしてあげるよ」だつて妾はお母様にしてくれなくちやいやだわ」一寸首を振つて見せる。

「それでもあたいもう武雄ちゃんのお嫁さんになつてしまつたんだもの」

「それなら妾行かないよ」菊ちゃんはひどく困つたと云ふ風に、切下髪の頭を右の方に傾けて、頻に何かいふ方法もやと考へてゐる可愛さ。

あるかなさかの朝風に、又梅の花が一片二片ハラ／＼と散つてよい薫りのすること、池の金魚は何と思つたか、それを飲まうとして浮き上がつたが、再び水の中に姿をかくしてしまつた。小波は温たかい朝日にキラキラとうつくしうかゞやいてゐる。

(評) ませたる女兒の口吻妙々、稚兒を描くに巧なる荷葉の小説を讀む心地す。

兄様の書齋

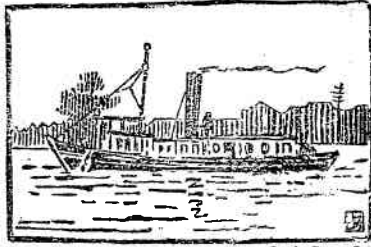
岩代須賀 服部 貞子

掛つて居る。これは兄様のお友達の筆とか、こちらの柱にはオーバコートが例の通り丈け長々と掛けてある。書棚の前に立つて、寫眞ブックを引出して見ると、ゆくとなくなつたと思つて居た千枝さんの半身のがチャインとこい、まあいつもつて來たのだらういから取つといやう、つひてにその傍の兄様の制服制帽の……此方のまアハイカラなこと！此人はまた、角帽をはじめてかぶりましたつていふやうな……オホ、

オヤ！靴の音が……

(評) いたづら寫し得て妙なり、はれつかへりの言葉もよく振まれり、化粧道具と千枝さんの寫眞も自ら照應して更に妙なり。

子やあ浦松 草淺 (外賞) 近附橋代永



秀逸

店の前

宮城 紅梅 女史

陰曆の正月二日と云へば妾の小な町も、何となう人氣が引立ち、それ福引の景物のと多くない人々が出て來て、先づ一寸賑であるが、今年は何たる寂寥な年だらう。夫れも其のわけ此の大凶作だもの、妾は店前に立つて此の悲惨な町の面を眺めた。勿論福引景物なん